悪党のトマト

高橋揆一郎

悪党のトマト

河出書房新社

悪党のトマト

一九九〇年一月五日　初版印刷
一九九〇年一月一〇日　初版発行

著　者　高橋揆一郎
装　丁　田村義也
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二
印刷　株式会社享有堂印刷所
製本　小高製本工業株式会社
©1990 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00604-3

悪党のトマト・目次

雌　7
向こうの実家　27
オホーツクの寺　43
お告げ　67
信号　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

木槌　125
夜行列車　147
悪党のトマト　181
鋏　211

悪党のトマト

雌

夕方六時過ぎ、豊吉が畠からあがってきて納屋の水道の水をひと口飲み、首の手拭いで口を拭きながら家に入ったところ、姉のアサはまだ帰宅していなかった。アサは毎日判で押したように六時前には帰り、晩めしの支度をするのである。五月の夕空はまだ明るいが、西側に近々と山や林を背負っている豊吉の家は早くも日蔭になって、風が急に肌寒かった。豊吉はアサを待ちながらぶきっちょにめしを炊き、夕餉を整えたときはもう七時近くなっていた。

しかたなくひとりでめしを食い、白黒のテレビの前で膝を抱えていた。姉のアサは、ここから一キロ半ほど山奥に入った椎茸とダリア球根の栽培場に、日雇いで通っているのである。いまは椎茸ではなく、ダリア球根の出荷時期で、多忙なことは多忙らしかった。

それにしても遅いので、豊吉はテレビを止めてさてという顔になった。連絡をつけようにも、豊吉の家はいまだに電話を引いていなかった。豊吉は懐中電燈を手に外へ出て、納屋から自転車を引き出し、ちんと手洟をかんでからペダルを踏んだ。家の前の細い流れに沿って、凹凸の激し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い林道を漕ぎのぼっていった。蛙が鳴く。タイヤが石をはじいてランプが揺れる。頭上の繁みがだんだんと濃くなり、山道は暗さを増してゆく。川に寄ったり離れたりして、途中からは自転車を押していき、最後の急坂をのぼりつめると平地がひらけた。一帯は砕石場である。頭上高く點る裸電球がトタン張りの人夫小屋を照らしていた。ダンプカーが一台ぼんやりと浮かびあがっている。左手の高い尖った山が天頂から削りとられて、夜目にもほの白い岩肌は、巨大な人間の顔に見える。

豊吉は胴震いをしてさらに奥へ分け入った。沢地につくと屋根の低い椎茸小屋が見分けられ、左上の平地が球根の畠。そこに経営者の坂井吉五郎の家が建っているのだが、一点の明りもなく、家は周囲の暗黒に溶け込んでいた。

豊吉は不安に駆られながら、入口につながる細い道を少しのぼって家の前に立った。姉のアサに従って一度きたことがあるので、懐中電燈を頼りに入口の板戸に手をかけると、錠はかかっていず、戸はすぐにあいた。敷居から覗き込んで懐中電燈をゆっくりと回した。無人である。六畳ほどの板の間の真中に薪ストーブが据えられ、左手が台所である。右手の出窓の下に、ちゃぶ台やら酒壜やらが雑然と置かれている。奥にも部屋がある。アサはそこの事務机で伝票整理や出納の仕事をするのである。

奥との仕切りの障子が一枚だけ開いているので、豊吉は姉(ね)っちゃと低く呼びながら靴を脱いであがっていった。返事がないので、ストーブをよけながら障子の向こうを照らした。無人のはず

がそこに人がいた。脚をこっちに向けて仰向けに倒れている。二本のズボンの脚はアサのものである。豊吉はしゃがみ込み、屁っぴり腰でアサの足をつかんでゆさぶった。

姉っちゃ。アサはぴくりとも動かず、豊吉が恐る恐るその顔を照らすと、下から光を受けたアサは目も口も薄くあけて死んでいた。

豊吉は悲鳴と共にストーブに蹴つまずきながら土間にとび降り、靴をつかんで外へころげ出た。自転車に跨るのも夢中で、小道を一気に降り、砕石場の平地で轍にタイヤをとられて自転車もろとも横転したが、どうやって立ち直ったかも覚えていなかった。平地を横切り急坂を降り、林道へ出てペダルを踏みに踏んだ。自分の家には目もくれず、そのまま畠地と川の間の道を走り、ひらけはじめた新興住宅地を縫って本通りの交番へ駆け込んだ。

若い巡査が執務中だった。豊吉は、姉っちゃが殺されたや！　と喚いて腰が立たなくなった。なに、どうしたてや、と巡査が立ちあがるのへ、尻餅ついたまま手を振って、姉っちゃが、姉っちゃがといった。

まずおちつけや。巡査が引き起こそうと腕をとるが豊吉の興奮はやまず、姉っちゃが殺されたや、とくり返すばかりである。訊かれるままにようやく、自分はすぐ近くの百姓の近藤豊吉で、姉の名はアサで、場所は砕石場の、椎茸と球根栽培場の坂井さんの家でと、とぎれとぎれにいい、なお質問に応えて、まっくらな家の中にアサがひっくり返っていて呼んでも答えず、足を引っ張っても電燈で照らしても動かず、もうだめだ、殺されたや、と陳述した。

巡査が急いで住民台帳をめくり、豊吉とアサの名を確認してから、あちこちに早口で電話をかけるのを見て、豊吉はコンクリート床に坐り込んだままひいひいと泣き出した。巡査が電話報告を終え、大急ぎで拳銃を腰につけ、帽子をかぶったところへまた電話が鳴り、巡査は直立不動で応答をした。それから自身をおちつかせるように椅子に坐り直して、泣きやまぬ豊吉に、気持は分るけども四十男がそんなに大きな声で泣きなさんな、といった。しばらくして何台ものパトロールカーがサイレンを鳴らして近づき、新興住宅地の交番は、所轄の署長や刑事課員やらの十数人の警官を迎えてものものしくなったが、すぐに豊吉を先導のパトカーに乗せてフルスピードで現場へ向かった。

山間の一軒家は煌々と照明燈に照らされて、警官の影が動き回る。豊吉は入口の外にしゃがみ込んで頭を抱えていた。そうやってアサが運び出されるのを待っていたのだが、アサは運び出されずにそのまま夜を明かすことになった。翌早朝から検視をするという。家の中から警官がぞろぞろと出てきて、平地のパトカーまで降りてゆく。徹夜で見張りをする一、二の警官を残して、豊吉はまたパトカーに乗せられて自分の家に帰ってきた。

刑事という男が二人あがり込んできて、家の中をじろじろと見回し、夜分にわるいけれど話を聞かせてくれというので、豊吉は自転車もろとも転んですりむいた膝小僧をときどき舐めながら、聞かれるままにぼそぼそ、ぼそぼそと喋った。

まずあの栽培場の坂井吉五郎という親方はどういう男かと刑事が訊くから、おらは、姉っちゃと一回だけあしこさいったけど、ちょっと見たばかりだからなも分ンねすといった。なんぼかでも分らねか、と重ねて問われ、そういえば姉っちゃの話では、親方は女房も子供もいない独り者で、年はまだ五十前ではないか。あまりものをいわないひとだともゆってらす。豊吉はそれ以上は体の大きい男だとしか答えようがなかった。刑事はしつこく訊く。警察でもゆくえを探しているけれど、ほかにどんな人間がいたかや。姉っちゃはゆってらす、堀内っつぁんというひとと、かたやまだか、たかやまだかいうひとと二人使われていたすけど、おらは二人とも見だことねす。なも分らねんだな、あんた。はえ。何ちゅうても第一発見者はあんただからな。はえ。重要参考人ちゅうことだ。と刑事は豊吉をじっと見る。それから、アサはあそこでどんな仕事をしていたかと訊かれた。豊吉は、姉っちゃは先月の末に雇われてまだひと月もたっていないけど、いつも弁当を持って、朝は八時半ごろ出ていき、夕方六時前には必ず帰ってくる、仕事は、球根を包装したり、少し算盤ができるので伝票のようなものを勘定したりしていたようだといった。

刑事はタバコをふかしながら、けさ家を出るときに何か変わったことはなかったかという。その目が豊吉の目に張りついて離れないので、豊吉は思わず下を向いて、なんも変わったごどねがったす、えづもとおんなしであったす、と答えた。あんたのいう、その姉っちゃだが、体の方はどうだったや、丈夫な方かそれとも。あんまし丈夫でねす、えづも肩こりしてらす、頭も痛がってらす。ほう、しょっちゅうかや。しょっちゅうでもねすけど、大方しょっちゅうであったす。

少し突っ込んで聞くことになるが、この家にはあんたと姉っちゃと二人きりで住んでるのかや。はえ。なしてだかそのへんのところ少し喋ってみてくれないか。

豊吉が、おら口べたでうまく喋れねすけどというと、いやそれだけ喋ったらりっぱなもんだと刑事は笑った。仲間の刑事は笑わずに横を向いてタバコを吸っている。へば、わけちゅうわけはと、豊吉はときどき息をつぎながら喋った。まず爺さまの代からこの家があって、少しずつ普請をしながらいまのようになった。爺さまも婆さまも早くに死に、おどさんは十三年前に、納屋の裏で鶏をつぶしているときに自分も口から泡を吹いてぶっ倒れ、首のない鶏が走りまわるのを追いかけることもできずに死んだ。それから、おがさんはずっと先に家から逃げていった。あしかけ二十年も前になる。僅かな畠に芋や玉葱や苺を作ってきたけれど、そんなわけで、姉と弟と二人きりになってからもう十何年もたって、手のかかる苺はやめて何とか二人でやってきたけれど、このままでは先が見えているので、ついその辺まで押し寄せてきた新しい住宅地に、この畠を手放そうかという話をアサがしていた。それについてはもう、不動産屋が再三やってきた。姉っちゃはあの通り体が丈夫でなく、畠仕事が向かないので、いまは弟の自分がひとりで朝から晩まで畠仕事をしている。それは大変だな、畠を売る話は他人に喋ったか。だれさも喋らねす、姉っちゃが喋るんでねえってゆってらす。

逃げてったおっかさんの消息は分らねえのかい。分らねす、と豊吉は首を振った。おどさんに聞いたらば怒られるがら聞かれねがったす。それでもとうの昔に再婚したという噂もあって、ど

こかで生きているのはたしかだといった。なんでまた家出なんかしちまったのかなあ、と刑事がかまをかけると、豊吉は、おどさんと喧嘩したがらだべさ、と苦もなく答えた。おらまだ子供ンづき（時）だったから、はっきり分らねすけど。あんたなんぼのとき。はだち。はたちだら子供でねンでしょ、いやあんたなら分らなくても仕方がないか。はえ。ときにあんたの今日一日、姉っちゃの死体を発見するまでのこと話してみろや。

それならたやすいことで、けさはいつものように六時半ごろ起きて、耕うん機に油を差したり、鶏小屋から卵を出してきたりして、七時半ごろアサとさし向かいで朝めしを食った。アサはそれから自分の昼の弁当の握りめしを握り、ちょっとテレビを見ていたし、自分は便所に入ってくそをした。何やかやして姉っちゃは、したらいってくっから、とひとこといって出ていった。自分は芋畠を起こしにいき、昼に家へ帰って、めしを食ってちょっと昼寝をしたけれど、結局今日も一日中畠起こしをやった。六時ごろにあがってきて、姉っちゃがまだ戻らないので、ひとりでまためしを食った。しばらくテレビを見ていたが、あんまり遅いので心配になり、自転車で迎えにいったところあの有様であった。

六時ごろ畠からあがるとき、だれかに会ったかと刑事がいうので、豊吉はしばらく考えて、畠のあっちの有山さんの婆さまが、ざるを抱えて裏庭に出てきて、自分を見て何かいったが、よく聞こえなかったのでそのまま帰ってきたといった。自転車で出かける前にテレビ見てたのかや。はえ。テレビ、何やってた。にゅうすでながったべか、それから女のひとが出てきて歌コ歌って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.